

駒場

2005



東京大学大学院総合文化研究科
東京大学教養学部



KOMABA 2005

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

[駒場]2005



表紙に使われている3枚のイチョウのロゴデザインは、
設立50周年を記念して、
東京大学大学院総合文化研究科・教養学部の新たなシンボルとして策定された。
東京大学のシンボルであるイチョウの葉を3枚重ねることにより、
学部前期(教養)・後期・大学院の三層にわたる教育の融合と、
世界と未来に向けた学問と人の限りない交流と創造をイメージしている。
制作は、(株)禅 石塚静夫氏。

表紙について

ケーニツヒ音響分析機

19世紀末

80cm×90cm×40cm

金属製の円筒形の管（共鳴管）は、それぞれ特定の周波数の音に共鳴するよう設計されている。現在は失われているが、装置の横にはガスの炎をともし仕組みがあり、これらの炎には共鳴管から空気を伝える管がつながっていた。或る音（たいていの場合さまざまな周波数の音の組合せである）が発せられると、音の特性によって共鳴する管は異なり、また各管の共鳴の強度も異なる。それらの違いは空気の振動を介してガスの炎に伝わるので、音によって異なる炎の振動の型が現れる。音響分析機は、音を視覚化する装置であり、また、音を周波数成分に分解する、つまりフーリエ展開を行う機器でもある。木でできた直方体の各面には鏡がはられていたが、これにガスの炎を映して回転させると、炎の振動の時間変化がより見やすくなる。

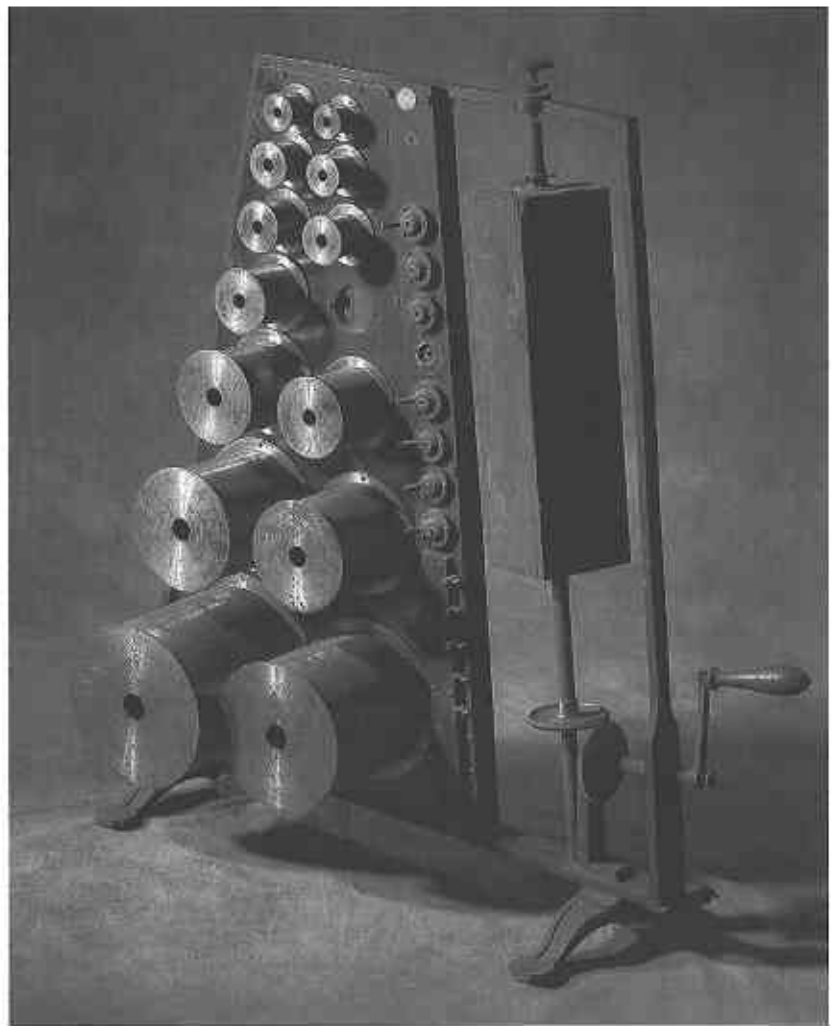
設計者のルドルフ・ケーニツヒ（1832-1901）は、19世紀後半、この機器を用いて母音の分析などを行い、またバリの工房で製作した機器を世界中に販売していた。同時期の物理学の大家ヘルムホルツとの音響理論をめぐる論争は、実質的にはヘルムホルツの理論の権威とケーニツヒの機器の信頼性の争いであったという。教養学部に残る音響分析機は、19世紀末に購入されたものと思われる。

ケーニツヒは精度を重視した機器製作を行い、量産はしなかった。工房で作られた機器には、頭文字のRとKを組合せた紋章を刻んでケーニツヒ作であることを示した。教養学部に残る音叉には確かにこの紋章があるが、音響分析機にはそれが見当たらない。杵の形態などからこの機器がケーニツヒ製であることは間違いないが、詳しく観察すると、機器の命ともいえる共鳴管のつくりはやや粗雑である。西ヨーロッパや北米に残るものでは、共鳴管は黄銅を木槌などでたたき出したものが使われているが、教養部部のものは、円筒形の部分と漏斗状の部分に分けて作り、あとでそれらを接合した、いわば大量生産型である。この型の共鳴管にはケーニツヒは刻印をせず、販売地域も限定していたようである。

（関連基礎科学系・岡本拓司）

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

[駒場]2005



東京大学大学院総合文化研究科
東京大学教養学部

[駒場] 2005

東京大学大学院

総合文化研究科

東京大学教養学部

●目次

	まえがき	7	
I	2005年度における大学院総合文化研究科・教養学部		
1	総合文化研究科・教養学部の現状(研究科長から)	10	
2	運営諮問会議(第1期のまとめと第2期第1回会議)	12	
3	教養教育開発機構の発足	15	
4	学術俯瞰講義の開講	19	
5	PFI事業による駒場コミュニケーション・プラザの建設	20	
6	第7回東アジア四大学フォーラム・ソウル会議の開催	22	
7	東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ(EALAI)発足	23	
8	ドイツ・ヨーロッパ研究センターの発足と 大学院修士課程「欧州研究」プログラム(ESP)の立ち上げ	25	
9	科学技術インタープリター養成プログラムの立ち上げ	27	
10	複雑系生命システム研究センターの発足	30	
11	美術博物館の活動	32	
12	自然科学博物館の活動	34	
13	21世紀COEプログラム 共生のための国際哲学交流センター(UTCP)	35	
14	21世紀COEプログラム 融合科学創成ステーション	43	
15	21世紀COEプログラム 心とことば-進化認知科学的展開	48	
16	ホームカミングデイの開催	50	
17	2005年駒場地区オープンキャンパス報告	51	
18	マッカーリス・アイルランド大統領の東京大学訪問	52	
19	社会連携への取り組み	53	
20	平成18(2006)年度からの学部前期課程カリキュラム改革および進学振分け制度改革	57	
21	教務電算システムUTask-Webの運用開始	66	
22	キャンパスの整備	67	
II	大学院総合文化研究科・教養学部とはどのような組織か		
1	沿革-東大駒場	70	
2	教育・研究上の特色-学際性と国際性	71	
3	教育・研究組織の特色-三層構造	72	
4	教員集団-多様多才な人材	74	
5	意思決定の機構	75	
6	各種委員会	77	
7	予算	80	
8	キャンパスの現状と将来計画	81	
	航空写真・建物配置図	82	
9	事務組織	84	
III	大学院総合文化研究科・教養学部における教育と研究		
1	前期課程	86	
1.1	前期課程教育の特色	86	
2	前期課程のカリキュラム	87	
2	後期課程	91	
1	後期課程教育の特色	91	
2	AIKOMプログラム-短期交換留学制度	92	
3	超域文化科学科	95	
4	地域文化研究学科	96	
5	総合社会科学科	98	
6	基礎科学科	99	
7	広域科学科	101	
8	生命・認知科学科	103	
3	大学院	106	
1	大学院教育の特色	106	
2	言語情報科学専攻	106	
3	超域文化科学専攻	109	
4	地域文化研究専攻	111	
5	国際社会科学専攻	113	
6	広域科学専攻生命環境科学系	117	
7	広域科学専攻関連基礎科学系	118	
8	広域科学専攻広域システム科学系	120	
9	「人間の安全保障」プログラム	122	
IV	大学院総合文化研究科・教養学部では、誰がどのような教育・研究を行っているか		
凡例	専任教員	128	
	特任・客員教員	324	
	外国人教師	337	
V	駒場の教育・研究・厚生施設		
1	図書館	342	
2	アメリカ太平洋地域研究センター	345	
3	情報教育棟	346	
4	美術博物館	348	
5	自然科学博物館	351	
6	パイプオルガン	352	
7	SCS施設	353	
8	共通技術室	354	
9	RI実験施設	355	
10	低温サブセンター	356	
11	留学生相談室・駒場インターナショナルオフィス	357	
12	学生相談所	359	
13	進学情報センター	361	
14	保健センター 駒場支所	363	
15	キャンパス・プラザ	366	
16	柏蔭舎	369	
17	ハラスメント相談所 駒場相談室	370	
18	三鷹国際学生宿舎	371	
19	駒場ファカルティハウス(国際学術交流会館)	373	
20	男女共同参画支援施設	373	
付属資料1			
2005(平成17)年度志願・合格・入学状況	376	2006(平成18)年度進学内定者数	377
定員の推移	378	2005(平成17)年度のクラス編成表	379
		研究生	381
		留学生	382
付属資料2			
シンポジウム	384	講演会	393
		学外からの評価	398
2005(平成17)年度科学研究費補助金	399		
2005(平成17)年度COEプログラム研究拠点形成費等補助金	413		
2005(平成17)年度厚生労働科学研究費補助金	414	2005(平成17)年度奨学寄附金	415
2005年度受託研究	417	2005年度共同研究	419
		2005年度の役職者	420
教養学部の教員	422	名誉教授	431